資料解題

「福島町の近代史」作成へ向けて～聞き取り調査から

笹尾省二

広島市の旧市街の西部に、西日本で有数の規模の被差別地区である福島町は位置する。少数点在の場合がほとんどである中国地方にあって、ここは例外的に人口五〇〇〇人をこえる大規模な地区となっている。

この福島町は、戦前においては、広島県水平社の本部が置かれ、一九二七年には第六回の全国水平社大会を中心となって開催したことからもわかるように、はやくから解放運動が立ち上がり、西日本における一つの拠点と言える地域であった。戦後もそれを受け継ぎ、さまざまな取り組みがなされたのであるが、そのような歴史を持つにもかかわらず、一時の運動の停滞ということもあり、また、以下の文章で明らかとなってくるこの地域がかかえる独特な要因もからんで、この地区の成り立ちについて、従来の研究で十分に明らかにされてきたとは言いがたい。

そこで、筆者も含めて数名のグループで、解放同盟福島支部の人々とともに、ここ数年、福島町の歴史を明らかにすべく、資料の収集を行ってきた。そこで、福島町に関する写真や地図を含めた文献資料の収集とともに、重点を置いたのは、地域の中で生きてこられた方々への聞き取り調査である。近世以前については、我々の手にあまるということから、さしあたり近代の歴史に限定して調査を行おうとしたのであるが、原爆の被災による文献資料収集の困難さということもあって、いきおい聞き取り調査に重きを置かざるをえなかったという事情もそこにはある。しかし単にそういう理由だけではなく、何

よりも地域で生きてきた人々の生の歴史の証言は、何ものにもかえがたい魅力のあるものである。この調査の結果については、いずれ資料集といった形でまとめられる予定であるが、本稿は、その中間報告的なものとして、福島町の歴史について考える際のいくつかの視点を提出するため、聞き取り調査の内容を紹介するものである。

いうまでもなく、この成果は共同研究によるものであり、また、解放同盟福島支部ならびに地域の方々の協力なしには形をなしえなかったものであるが、文責は筆者個人が負うものである。

一、福島町の成り立ちについて

福島町は、広島市の旧市街地の西端に位置する。現在でこそ、政令指定都市広島の中心部に近いといってもいいような位置であるが、幕末までは、城下町の外れにある集落であったということである。江戸時代には、「川田村」という地名で呼ばれ、その住民は広島城下へ通じる街道筋の西端における警備、死牛馬の処理と皮革の製造を主に担い、その他、農業や竹細工などの手工業に従事していたとされる(1)。この川田村は、明治維新以降、「川添村」という名称になり、それが一九〇七（明治四〇）年に「福島町」と改称されることになる。

この間の事情について、Ｉさんからの聞き取りにより明らかにしていこう。Ｉさんは、一九〇六（明治三九）年の生まれで、戦前は地域の指導者として広島市の方面委員などをつとめ、戦後は公選制のもとでの市の教育委員に選出されて教育委員長となり、市会議員もつとめた人物である。なお、Ｉさんからは、一九八五年一〇月、一九九一年一月、一九九三年二月の三度にわたって話を聞かせていただいた。

川田村から川添村んなった時の、川添村に変更した時のこの町の人口がですね、九三〇人。それじゃ川添村から福島町んなったのいつかと、こう申しますと、明治三九年に電車がこちらの一〇〇メーター（道路：筆者注。以下、聞き取り文中の括弧については同じ。）でなしに前のところを通りよったところに楠木があります。そこに＊＊さんという人がいて、＊＊さんの前に小さい、こうお宮が造ってある。それで＊＊さん、こんなそりゃ、なんじゃあなた誰を祀る、どなたが祀ってあるんの、あんた方の前へ、花を捧げたりあれこれしようるが。わしも知らんのじゃ、家の前あっても。そういう馬鹿なことがあるもんかえ、調べようじゃないかいうんで、町内の有志の人が川添村の有志の人が、その集まられて、十数

人集まられて、お宮ん中全部調査したら、福島正則公三男ハチスケを祀る、とこういう書付けが出てきた。ありゃー、それじゃこの川田村へ福島正則公の息子さんの三男を祀るということが書いてあるんで、福島公がここへ向けてやはり善政をやられたんじゃなーいうて。ま、とにかくこの福島は当時は野菜や何か作る公田の名がついとった。島んなって島ん中ではもう野菜もの作ったりいろんなものを作るいうんで、牛の関係や何かは一切なかったんです。それで何ですね、ここをずーっと福島公の三男を祀るいうことなっておると、これ、町名を変えてもらおうじゃないかと、こうなった。（中略）それで川添村はどうかというと、今申し上げたように明治三九年、日露戦争がすんだ明くる年の明治三九年に調べた結果が、ハチスケがもつ。こりゃあ、福島公の名をとろうじゃないかいうので、町民が願書をしたためて。（中略）それで今度願書出したところが、よし、福島町に改名したるいうので、明治四〇年三月二三日から川添村こと福島町となったのであります。（中略）それで当時福島になった時は、戸数が八二八戸、住民が三三二二人。

この聞き取りを行ったときには、Iさんの年齢は八〇歳をこえていたのであるが、記憶力は相当のものである。それはともかく、太田川の河口部支流の中洲状の地形にあった畑作中心の農業地域であった旧川添村が、一部近隣の地域などをあわせて、明治四〇（一九〇七）年に福島町という広島市内の新しい行政区画とされたということであろう。その際、町名には、江戸時代初頭に広島藩を治めた戦国武将福島正則から便宜的にとってきたということである。

それにしても、福島町が成立したときの人口が三〇〇〇人をこえていたというのは、相当な人口増加が、明治期を通じておこっていたということである。これに関して、Iさんは次のようなことを述べている。

明治二六年に広島にコレラが流行りまして、死人の数が、広島市史に載っておりますが、一六二八人。一六二八人、コレラで死んだ。ところが広島の人は、死骸の片づけ恐ろしうてようやらん。これを今の福島関係の人がそこへみなコレラの病気で死んだいうて一人もしとらん。それで困ってもう広島市は全力を尽くして努力したけれども人が集まらんので、それで県外へ向けて、何ですねこの死骸を向けてお願いしたところが、コレラも何もあるかいうんで手伝いに来て、死体の世話をしたわけです。（中略）それでその死骸を片づけに雇われてきた人がほ

うぼうに＊＊方面から来られたわけです。現在そんなことというちゃあ失礼ですが、私は全部市会議員なりまして謄本取ってくれじゃ何じゃいうんで頼まれて、当時は、今は謄本勝手に取れませんが、謄本取っておりますが、＊＊関係の人がこの町内で三分の一以上おるいうことだけは間違いありません。

明治中期のコレラ流行を一つのきっかけにして、町外からの人口流入があったことがわかる。また、この人口増に関して、長らく公務員として福島町に関わってこられたKさんは、次のように語っている。なお、これは一九九三年二月、Iさんと同席していただいて行った聞き取りの際の発言である。

（屠場はいつからあったのかという質問に対して）明治四一年ですか。今定かじゃございませんが。市史に出とる。それが江波島に、市史でいえば江波島に置かれておって、その後三篠に、こちらの三篠、横川の、あすこに家畜市場ができたと。それから福島で株式会社の食肉できて、それを四一年に市が買収してというような格好で、経緯やろう思うんですけど。これは軍との関わりや思うんですね。行政と、今度は軍であると。そこでこの地へ食肉屠場、市立屠場にしてですね、これに関わり業種ができた。それから大正一〇年に、今で言う広島城ん所で軍ができましたから、軍廠がね。一八年位にかけてだんだん大きくなっていきますけども。大きくなっていくにつれて、シベリア出兵があるという時にここへ来た人。それから今の市内でいろんな働き場いうんですか、就労のためにここへ来たと。そういう人たちが住む所は誰が作ったかいうと、この商店が借家を作ったわけです。だから民間借家業ですよね。工場も、自分のところに使っておる者は自分が借家を建ててそこへ住まわせる。

これは明治末以降の話であるが、軍都としての広島市の発展とかかわって福島町の人口増加が説明されている。軍用の食料の需要から食肉産業がおこり、また、軍靴の必要から皮革産業もさかんになり、その他さまざまな軍にかかわる仕事が増大して、それに携わるために各地から人々が流入してきたということなのだろう。

ということは、福島町は明治中期以降に産業の発展、特に軍に関係したそれとのかかわりで形成された都市スラムという性格をもつことになる。Kさんは、次のようにも述べている。

今言う明治の末期の、差別があったなかったは別として、企業活動が盛んであった。それからその企業は、所得はよかったんです。税金を納める。そこへ依存型の住民や職を求めて来る人が常に出入りしていた。しかも今言うように集まった人ですから、必ずその時点では故郷もっとるわけですね。封建時代のあれじゃないわけですから。そこでも出入りが激しい。そうすると配偶者も元おった所の人間関係なるものからもらったりする。そこでここの異姓率ですね、異なった姓、この異なった姓ですね、これが非常に高いんですよ。で一応同和地区というのは、この一団なら一団がですね、どういう苗字でいやどこどこじゃろうという分かるいわれる位ですが、ここでは絶対それが分からんです。

（中略）

それでこれを越えたここから先は畑だったわけですね。そこへどんどん借家が明治んなってできたわけです。借家群ですね。その時の状態をみますと、やはりバラック建てのようなものも多い。それから邸宅のようなものも。貧富の差が非常に激しい。そこで＊＊（広島市旧市街地東部ににある、もう一つの被差別地区）の方からみる場合に、福島は非常に生活レベル低い、出入り多いと、移動するということで。＊＊の人も来ましたけれどもほんのわずかですね、こちらへ来とられる方は。こちらから＊＊へ行っとるのはほとんどいない。いられない。それはこっちは経済力があるから、あるいは移動するから。ちょっとも固定的でない。＊＊は固定的で常に四二〇世帯位が大正時代からほとんど動いてない。土地も家も自分持ちであると、現在も。ではこれどの位借家をもっとる、いうよりも自分の土地で自分の住んどる歴史もつ人おるのか、あるいは何代続いた家があるかいうと、今では調べもできんですね。

（中略）

俗に言う都市スラムとスラムに似た集団というね。そういう所は広島市の、さっき近代化と軍都としていくためには必要やったわけです。そういう人を救済してくれる場所が。

広島市内のもう一つの被差別地区との比較をまじえながら、福島町における人の出入りの激しさが説明されている。実際、この町においては、三世代前までさかのぼって住民であった人は数えるほどしかいないという話をよく聞く。その理由として推測できるのは、市域の拡大の中で、ほぼ市街地中央に含まれるようになったといってもよい地理的位置と、軍に関係する産業の地域内への立

地ということではないだろうか。

このような人の出入りは、原爆の被災を経て戦後も続くことになる。そして、福島町という地域のそういった特質は、そこにおける解放運動に大きな影響をおよぼすことになるが、それについては、最後にふれることにしたい。

二、戦前における運動

次に、第二次大戦以前の福島町における解放運動についてみていきたい。やはり、Iさんの証言である。

明治四〇年に、福島町になってまもなく五月二日に福島町中通りと南三篠、南通りの一部が大火があった。ほとんど家が焼けたわけです。焼けて、もう、広島市から義援を市民の人や外部の方から義援金や何か贈られたり、布団じゃいろいろなものを贈ってもろうて何したわけです。それで今度はこんな一つ、福島町が、自立し、自立して立ち上がるためには、一つ今度は福島町に一致協会いうものを創ろうじゃないか、一致協会。一致協会いうのを創ろうじゃないかいうことになったわけですね。

（中略）

それで一致協会いうのを設立するいうことになると、市史にはどうだっていうと、牛を屠殺すると血が出ますね、血が。その血をですね、器にとって売るわけです。ところがそれを牛の血を、生きた牛の血を飲むと病気がようなるいうんで行列で買いに来る。それが年間驚くなかれ、多い時は二〇〇〇円です、当時の金で。二〇〇〇円くらい。少のうても一五〇〇、六〇〇円。それでその金を基本として、結局町民の中で優秀な者を学校へも行かしたり、婦人会へも、老人会へも、青年団へでもやろうじゃないかということを、皆で話しおうた。

この一致協会とは、自主的な部落改善団体として結成されたものであるが、牛血という自前の大きな財源を持っていたことは注目される。協会は会館を建設し、そこに福島町夜学校を開き、昼間家事の手伝いなどで小学校へ通えない児童のための教育を行ったという(2)。その他、Iさんの証言の中にあるように、この一致協会のもとに青年会が組織され、活発な活動を行ったのである。

ところで、この青年会は、公的には小学校長が団長を務める官製の天満町青年団の組織に属し、北通り、中通り、南通りといった各通り別の五支部に分断され、その運動は地域的な改善運動の限界をこえることはできなかった(3)。そのような官製の活動にあきたらない青年た

ちは、この後述べる水平社の結成と時を同じくして、独立した「躍進青年団」を結成する。この躍進青年団について、Iさんは次のように語っている。

大正一一年に水平社が発足して、それから今度は今のソビエトが結局革命起こしたんが大正六年で、その頃から社会科学の研究がどんどん出てきたわけで。それでその、なによね、そのような官製によるよの、青年団はなんじゃいうて入る必要ないじゃないかというので、革新系の人々が躍進青年団いうのをつくったわけよ。躍進青年団いうのを。だから二つできたわけよ。二つ。ところが、私はどういう態度をとったかいうと、私はよね、その躍進青年団もいいけれども、それ勢力が狭いと。なぜなれば、やはり福島小学校の校長のもとにおけるところの青年団入っておけば、幹部級んなれば、全市がやっぱり会長や団長と会うことができ、強く交際を求めることができる。そういう利点を考える時に、躍進には入るべきでないと。こういうんで我々は、なにして、昭和六年まで私は躍進青年団へ入らずに、福島青年団へ入ったわけよ。

Iさんは、水平社の活動を否定しているわけではない。いやそれどころか次に述べるように積極的に運動にかかわっている。その中でこのように躍進青年団を見ているところに、生活全体をかけた闘いのずぶとさを見ることができて、興味深い。

次に、水平社の結成についてである。同じくIさんは次のように語っている。

県の水平社、これは全国水平社、昭和、あの大正一一年三月三日にできて、広島県のは結局県連、連合会が設立したのは、あのなんじゃから大正一二年の七月三〇日やから。今の広島の十日市の、西十日市の広電のタクシーの所が、あこへ新市座いうんがあってそこへ……いう映画館があった。

照山正道。あれは今いう通りに、第二回の全国大会京都であった時に乗り込んで行って、有馬大寧いう融和団体の親分を攻撃したわけよ。この水平社の大会へ来て君が祝辞を述べる必要はないんじゃいうて。必要な述べるだけの資格をもっとる人間じゃないと。貴様らこそ我々を侮辱した張本人じゃないかとかいうて、退場を命じるいう決議を出したわけよ。

それで体が、肋膜で体が悪いのに、第一回の県連大会があった時に初代の委員長にいうことんなっとったんじゃ。それがもう病魔に倒れて起きられんで。その代わ

り大会の日には人力車に乗って会場にだけは来た、会場へだけは。それは会場の様子を見るだけや。まああの日に五〇〇人位警察官が出たろうな。警察がぐるっと取り巻いて。集まったのは千人以上集まったんじゃが。それからわしらは結局、福島町へ行かずに、今の本部の方の下足番みとうな役を、お前らなんじゃいうて、各地から我々兄弟が来るのに、連絡を取る者は連絡であっこへ、いや府中から来たじゃなんじゃいうのをみなにをせい、手伝えいうので行っとった。それから荊冠旗を、馬へ乗ってもろうたんが＊＊さんいうのが、馬へ乗って荊冠旗をもったんよ。威勢がよかったよの。わしゃ、しもうた思うての。わしらまだ若かったけえの。あんなにあんた下足番みたいな役をやらされとったけ、そりゃあんた、いかんよね。福島の方から連れだってきた方がよかったよの。ほら、警察官がずらーと並んでの、取り巻かれて。ありゃあの当時のなによの、忘れることできんよの、現実に。

組織づくりあんまり動かなんだね。青年会でも水平社へ入るんと、危険思想いうんで逃げるのもおるし。危険思想じゃいうんで、恐れて逃げる人もおるし、水平社へ入る人もおるし、入らん人もおるし。それで今いう通りに、入っとっても革新系は別個んなってきたいうことよの。もう一年位後には別個に分かれたけえね。

非常に生々しい証言である。発足当初からさまざまな潮流を含みこみながらも、被差別当事者の主体的な解放運動が感動的に開始されたことがわかる。

三、戦後における運動

次に、戦後の福島町における運動についてみていきたい。まず、戦後の広島の労働運動に深くかかわってこられたMさんの証言からである。Mさんには、一九九二年の四月に話をうかがった。

いろんな闘争がありました。例えば物価値上げ反対闘争ってなものを四八年にはやったことがあります。こういう時には労働組合以外の人たちに呼びかける。そういう時に必ず参加してくれるのがですね、あのう、解放同盟と朝鮮総連だったんです。ですから戦後私なんかの労働組合で、今みたいに机に座っているような労働組合ではなくって走りまわっている時に、私たちの共同闘争の一番強力な同盟軍っていうのは、解放同盟であり朝鮮総連であったということです。

このように述べて、広島の戦後の労働運動にとって解放運動が一翼を担っていたことを明らかにする。そして次のように続ける。

そうしていよいよ起きてくるのが、太田川改修闘争です。これはあの、太田川っていうのは、昔福島川っていうのがあった。七つの川っていうのは福島川含めて七つの川で、今六つの川なってるわけです。で、それを潰してですね、あのう、己斐といってたのを放水路っていう形で大きな川を通すと。それによって洪水を防ぐという。これ、戦前から始まってる。一九三三年から一九四四年まで、一〇年間にわたってですね、これがやられて。結局この四四年で、とても戦争中でこれ以上どうにもならないっていうんでストップされた。で、これを戦後んなると、またぞろ再開の計画を立てまして、これは建設省、県、市が一体になってやるわけです。これに対して福島の人たちは、非常に危機感を覚えた。というのは結局太田川改修といいながらですね、事実上福島町を潰すんじゃないかという。私はそれもなかったとは決して言えないと思っています。町を潰すという。で、そういうことで、福島町の死活の問題だっていう。当時の記録の中にも出てきてます。ですから福島町を潰させるなということで闘いが始まっていくわけです。

この太田川改修問題とは、古来からいく度も洪水を引き起こしてきた太田川の治水のために、市街地の西端に放水路を掘削し、そのかわりに福島町の東部を流れていた福島川を埋め立てるという計画であり、一九三二年に発表されたものである。福島町民はこの改修工事にともなう強制立退き、土地買収の問題に直面し、水平社広島県連合会は、立退き反対期成同盟会を組織し、福島川廃川敷地無償貸与、居住権の保障、公営住宅の建設などを要求して闘いを行った。その結果二〇〇戸の公営住宅の建設が決定され、工事が進められたが、戦時下で中断され、戦後へと問題が持ちこされたのである(4)。

Mさんの話を続けよう。

着工開始が五三年の一一月ですね。で、五四年から土地の買収に入っていくわけです。ところがいやだという人はたくさんいるわけです。それで五六年にはついに裁判にむこうが出して、代執行、つまり強制立退き、立退き強制をやろうとした。そこで立退き擁護連盟というのを町の人たちでつくりました。で、彼らは代執行するために警察官の動員を要請したりしました。ま、そういう

ことで一番さかんな闘いは、五七年、一九五七年の八月の最初の一週間でした。私も今でも覚えていますが、私は当時は労働組合の関係もあり、とにかく支援共闘で、いつも皆来てもらって、今度は俺たちが支援に行こうっというんで行きました。夏の暑い盛りで、皆がですね、町に出て、あるいはマイクでアピールしあるいはメガホンで訴えて、そしてお互いにお互いを激励しあいながら団結をして、むこうの強制執行を妨げるように、あのう、町を皆んなで守ろうという闘いで。今私の記憶に残っているのを目をつむってみても、非常にやっぱり盛り上がりが強くて、あの、激しい対立があったというふうに思っています。ま、そういう中で、結局福島川は埋められるわけです。だけどもう一回俺たちの町をつくれっていうんで要求してつくったのが、あの都町なんですね。だから都町っていうのは、むこうが潰した福島川を埋め立てた所に、俺たちの町をもう一回つくれっていうんで都町っていう名前で、あの町をつくった。それが今残っている都町です。ま、もとはあそこは福島川が流れていた所なんですが。ま、この闘争は、今からもう、ですから三〇数年前になりますけども、私のみた福島町における一番最初の大衆的な闘争でした。おそらく戦後から初めての大規模な大衆闘争だったのではないかと思います。確かに川は潰されましたけども、町を闘い取るということで。むこうにも必要な補償をかろうじて何とかさせながらですね、やっぱり闘いながら。あの時の、あの暑い夏のことを私は今でも忘れることはできません。

この戦後の太田川改修闘争には、戦争で工事が中断していたところに、戦中、戦後の混乱のなかで、原爆被災を含めて住む場所を奪われた人たちが多く移り住んできていたという事情もかかわっているようである。このことについて、Kさんは次のように語っている。

昭和七年に始まりました太田川放水路の工事の時には、まあ戦争中ですからもちろん軍が背景にあって強行された。で昭和二三年に再開されると、放水路の工事がですね、その時に大きな反対運動が起こったわけです。しかしその時にはすでに半分くらい堤防ができとったわけですね。昭和七年から始まって昭和一九年に中断するまで。昭和一九年に工事中断までにはだいぶ、ほとんどこちらの用地買収もすんどったわけです。だから官有地的なものになっていた。（中略）だからこの二三年に再開される以前では、二〇年八月六日の原爆投下によって、市内あるいは近郊からね、公有地ですからここへこう住めま

すわね、住めるところやから。（中略）だからそれは同和問題とどうなるんかといった点では問題があるわけですね。もちろん、知らずに子どもと親といっしょに来て、現在ここに住んでおられる人もおるわけです。

で外地からの引揚者と同じようにこの市内にも、山県あるいは高田の方から外国籍の人がね、朝鮮へ帰るんですね、いうんでこちらへ出て来られた。それでどうも帰れんらしいうんで、またその外国籍の人もここに。

で戦後二三年に再開する時に、今言う山沿いの所をね放水路にするとはおかしいじゃないかと、いうのが理論的なまず反対闘争。山沿いは土砂が流出するのははっきりしとるじゃないかと。ところがそういう問題と合わせて、この地域を、かつては三〇〇メートルの放水路全部取りゃ、改修地域がなくなるんじゃあるまいかという話も漏れ聞いたこともあると。（中略）ここを取るんだったら、これまで積み重ねてきたあるいは虐げられてきた課題を解決しなさいと。そのための施策としてということで、要求という、戦後初めて要求という形でだった。だから二八年には再開しましたけれども、その間まだ解放運動は一本でしたから、全国から支援があったんですね。ところが住んでおります人の状況は、先程言いますような、非常に混住的な要素で、何代もここに住まわれた人じゃないわけですね。二〇年八月六日以後に、昭和二一、二二、二三年に避難してきた。で二三年に再開しようとした時に、今度は戦後建設省になったと思いますが、太田川工事事務所が実態調査をすると。まずもってやりますわね、どういう具合な状態かと。その時の戸数とですね、昭和二八年にいよいよこれで立ち退き交渉なり、対象を確認する時の数というのはうんと違うわけ。ずーと増えている。ここに住んでおる者は、さっきも言いますように、二〇年八月六日以降においでた人が多いと。二〇年八月までには一七戸しか位、一三戸か一五戸しかなかった所へ二〇〇、三〇〇てな人、戸数が増えた。

Mさんの話にもKさんの話にも出てくるように、この太田川改修問題とは、福島町の人々にとっては、川の氾濫を防ぐという名目のもとに自分たちの地域が潰されるという恐れを抱かせるものであった。行政の意図がどこにあったにせよ、差別の問題に正面から取り組むのではなく、川の改修を名目に土地を取り上げようとする行政に対して、地域の人々は怒りをもって立ち上がり、まず水平社以来の解放運動の立場からの闘いを行った。

しかし、現実に立ち退きを迫られる人々の実態をみると、戦前からの住民はむしろ少数派で、故郷をめざした

在日の人たちを含めて、多くは戦中、戦後の混乱期に移り住んできた人たちという問題があった。ということで、せまい意味での解放運動の立場からだけでなく、全住民の生活権擁護という性質も、この闘いは持つことになった。

Kさんの話を続けよう。

こちらの側が案外その当時は、後に区画整理される所ですがね。（地図を指し示しながら）こちらの線です。自分たちとは余り関係がないいう意識だったわけです。それは生活的なあれもないわけですよね。先言いましたように、こちらが主要には、この川沿いが企業や住民居住地です。そこに太田川闘争があっても、二〇年には一七戸だったのが、何でその同和問題てな歴史的な課題を含めたものとして、運動としていかざるをえなかったのかとかですね、単にこの地域が同和地区だったからそうなのか。その点で住民意識の中に、ここに住んでおられる人でも、例えば昭和二九年に六〇〇何世帯あったと。これはここに一九四の木造市営住宅作る。それからここは土地をもらって出た人もおる。それ以外にこの古い所へは行かれた人もおる。で半数は外へ出られたんですね。だから半数は外へ出たいうよりも、元々外だった。ということ、ようなことは余り問題にされてない、地域でも。だから闘争の歴史としてはあるけれども、闘争をする側とですねされた側。その際町内的な、自治会的なものと、それから解放運動的な、生活擁護的なものとの二つがここにもあったわけですよね。その二つのものがあって、やる、やらさんというようなことがありましたけれども、結局はまあどちらの運動であれ、最終的には一本の補償でなきゃならなかった。それを合意してこちらへ移っていく。あるいは土地をもらって、あるいは補償をもらって出ていくと、こう変わっていったわけですよね。

この太田川改修闘争に引き続く形で起こったのが、広島市街地の中心部を東西に貫く平和大通り（一〇〇メートル道路）の建設にともなう、いわゆる都市改造闘争である。この平和大通りの西端が福島町を分断する形で通ることになり、多くの住民の立ち退きが求められたことから始まった闘争である。

長くなるが、Mさんの証言である。

そのもう一つ引き続いて起きたのが都市改造闘争といいまして、福島町をですね、きれいな町にするということなんです。ところが一〇〇メートルの計画ができたの

は戦後初めなんですよ。あの一〇〇メートル道路です。僕ら、まあ幼稚な話ですが、あの一〇〇メートルなんて道路つくって何するんだと。これはアメリカの飛行機がですね、あすこを滑走路にしてね、いつでも入れるようにするんじゃないかっていうね。そういうことで私は当時の浜井市長とけんかしたりしたこともありました。ところがこの一〇〇メートルがですね、抜けないんですよ。他の方は全部抜いてきたけども。なぜかといったら、皆さん方は御存じないでしょうが、あの一〇〇メートルの己斐からですね、四〇〇メートル、一〇〇メートルっていうのは幅の問題です。あの縦の方ですね、今あの己斐橋があります、大きな。で、あのこっち側の根元から四〇〇メートル行くとちょうど天満町あたりなるでしょ。で、そこまでは見に来たんですよ、一〇〇メートル道路を。ところがこの最後が抜けない。なぜかっていうと、あそこにはびっしり福島の町があったわけですよ。で、私もよく町の方たちと会うたびに言ってましたけども、あそこは特にね、小さい道路がたくさんありました。それで縦横無尽に道路がありましてね。しかもそうですね、それが幅五メートルかそこらの道もたくさんありました。で、後になって調査ん中で私どもはわかったんですが、雨が降るとね、水はけが悪くなってドロドロんなるんですね。それでどうもおかしいんじゃないかっていうんで、ちょうどこの闘争のさなかに市役所に押しかけていって、私もいっしょに行きましてね、あのう、下水図を出せといって下水の図面を出させてみましたら、この下水がつくられたのが明治のですね、何年だった。これは明治からやってるとしたら当然錆びついてそういうこと起きてくるわけです。で、そういう下水道ですから、雨が降ったらすぐもうあふれてしまう。当時は皆あの、豚飼ってましたから、鶏飼うより皆一頭か二頭かですね、皆飼ってました。ま、そういうものがある以上は一〇〇メートルはどうしても完成できない。だから住宅地区改良っていうのも、一つのいい名前ではあるけれども、反面には一〇〇メートルを抜くと、要するにあすこを立ち退かせるということでもあったわけです。で、ま、ここで一〇〇メートル道路立退き同盟というのをつくりましてね。

（中略）

いっしょに三〇〇家族でつくった同盟といっしょに行動を起こしました。それでここでは結局、一〇〇メートル道路を四〇〇メートルの長さにわたってとにかく抜くということ。それから福島町の道路ですね、基幹道路は必ず一一メートル以上つける。そういうことで彼らは臨

んできました。で、ついでにこれは参考のために言っておきますけど、計画の全区域は三六万三千平方メートルです。だからずいぶん広い地域です。三六万三千平方メートル。で、事業費は二億円、当時の金で。家屋の移転が六〇〇戸、全部で。で、むこうはですね、四階建てのアパートを建てるというんですね、改良住宅を。それを皆で議論しますとけんけんがくがく意見が出ましてね。あのう、アパートっていうのは、上の方へ行きゃあ行くほどしちりんもたけんじゃないか、いう話も出ましてね。やっぱりね、木造がいい、しかも平屋建てがいいというんで、都市計画事務所、県の、これと私も同席してだいぶけんかをやりました。

（中略）

三〇〇家族が中心になってこの同盟に入ってない人も、このオルグして参加をしてもらいながら闘いました。で、この、住宅に関していえば、結局皆んなで言い分が通ったのはですね、四階建てのアパートです。それはまあ、一部分をほれじゃ認めようと。ただし二階建てのブロックの住宅をつくれ。全部アパートにするっていうのは許さんいうので、かなり時間かけて、あのう、集団交渉をやりまして、むこうも認めざるを得なかった。そうしてできたのが、あの福島二丁目のブロック住宅だったんです。で、この広さも結局とうとう集団交渉で一一坪半ということにさせました。それで間取りはどうしろ、一階はどうしろというようなところまで、この同盟主導ですね、いっしょになって認めさせました。そいで養豚問題については後に残りましたけども、養豚の補償をさせるということの闘争やりました。そいで結局、最後に残ったのは移転補償でした。むこうの移転補償ってのはどうしても私たちは承認できない。

（中略）

そういう中で最後にはですね、三〇〇家族全部県庁へ押しかけて、議会の廊下に皆がすわりこみをやりました。結局一億一千二百万の補償で妥結を致しました。それで新しいアパート、ブロック住宅の家賃はですね、六〇〇円にするということを約束させたんです。ま、これが二回目の大きな闘争であった都市改造闘争であります。ですから太田川改修闘争とこの都市改造闘争ってのは前の闘争がすんだ後よりすぐ起きてきたわけです。で、私は今でも思いますのに、太田川改修闘争ってのは、太田川の氾濫を防ぐためにということなんです。実際にはこれ、福島を潰しかねないような、そういう形でこれが計画が行われてきたということです。それから二つめのはですね、都市改造闘争といいながら実は一〇〇メートルを抜

くための手段としてやってきたということです。それに対してともかく、福島の人たちは長期にわたってですね、これ、それぞれ何年もかかってるんですよ。そういう太田川改修闘争は初めからいいますと、着工開始から最後の激しい闘争までですね、四年かかってる。それから都市改造闘争もですね、この始まってから最後までですね、いくのにですね、こりゃまた四年ぐらいかかってます。そういう、ま、長期な運動をですね、この、皆で耐え抜いて皆で励ましあいながらですね組織をつくって闘い抜いてきた。ま、そういう先輩たちの努力と闘争によって今日の福島ができているということをですね、ぜひ皆さんで知っていただきたいいうふうに思います。

一九五〇年代から六〇年代初頭にかけて、このような闘いが福島町にあったのである。現在の福島町の町なみの基本は、この時期につくられたと言っていいだろう。その意味で、太田川改修闘争と、都市改造闘争の中身については、さらに詳しく検証されていく必要があるだろう。

おわりに

以上、福島町の歴史について、いくつかの視点に限って、聞き取り調査の内容を紹介してきた。これらから明らかになってくることは、現在の福島町は、近代以降の大きな人口流入によって形成されてきたということである。起点は近世江戸時代にあるにせよ、直接現在の福島町につながるものは、戦前においては軍にかかわる産業の発展にともなう人口流入、そして戦中・戦後の混乱期に生活の場を求めてやってきた人々の流入に求めるべきだろう。その意味で、福島町は、近代以降に形成された都市部落と言ってもいいように思う。

そのような福島町の成りたちの特質は、そこでの解放運動のあり方に大きな影響を与えてきたのではないだろうか。

Kさんは次のように語っている。

そういう経緯だから地域に対する愛着とか、定着性とか、あるいは歴史的な地域の中で自分がどう磨かれていくのか。そういうものがやっぱり私どもは東部の運動体等の関わりをみまして、希薄だと思いますね、希薄と。過去の運動というのは、福島へ行けば活動ができると。自由に。拘束がないわけじゃから。自分のとこじゃないから。自分の所でやるのはどうも何か拘束、数少ないから。（中略）その点でだからここのことを語るのは難し

いんです。単に地域の歴史だけ語ったんでは、自分の実感としても涌いてこんわけです。で家へ帰って、うちは元々どっから来たんやと、おおうちは福山や、ここじゃ違うわい言うたら、それで終りでしょ。

流動性の高さこそが福島町の特色であり、そこにさまざまなしがらみに拘束されない自由な運動が一時高まる可能性が生まれるが、逆にそれが継続性の面での弱点にもなるということなのだろうか。

いずれにしても、流動性が高いからといって、それが福島町に対する差別的な視線を強めることはあっても、けっして弱めることはなかった。Mさんは、子ども時代の思い出を次のようにふりかえっている。

小学校ぐらいになると電車に乗って己斐へ行ったり、駅の方に行ったりということがあります。ちょうどその時期に、私の母親は私に部落差別を教えこみました。今でも私はその瞬間を覚えていますけども、何とも言えない怖い顔をして私に、誰かも言っているように、それを見ると心が凍えるような形の手を差し出して、私に教えこみました。で、私にとってはまだ小学校入ったばかりのころですが、なぜそうなんだということがどうしても私にはわからない。それで母親にそれを聞こうとしたら、もっと怖い目で私をにらんで、そういうことは聞かんでもいいと言って、私に黙るということをですね、きびしく教えこんだのが、今でも脳裏に深く残っていまして。

Kさんも次のように語っている。

（地区外の人たちは）福島という言葉をよく使うし、要するに結論で言うと、私の個人的な体験からしてもね、差別というのは相当きついというなね、この地域に対するね。もちろん差別する側は実態を全然分からんで言ってるわけですよ、このことはね、根拠がないわけですよ。だけどもそういうイメージというのはね、広島辺りではかなり強いですね。

人々は、このような強烈な差別意識の中で生きてきたのである。そこでは、生きること自体が差別との闘いであったというべきだろう。

今後、そのような人々の生活のあり方をさらに明らかにしていく必要があるだろう。その意味で、本稿では紹介できなかったが、日々の生活を成り立たせた生業、特に製靴業と食肉にかかわる仕事について、掘り起こしの作業が必要と考える。

(1) 広島市『新修広島市史』第三巻一〇〇～一〇二頁（一九五九年）

(2) 広島県『広島県史』（近代Ⅰ）一〇八三～一〇八五頁（一九八〇年）

(3) 広島県『広島県史』（近代Ⅱ）五三二頁（一九八〇年）

(4) 広島県『広島県史』（近代Ⅱ）五六八頁（一九八〇年）ならびに　広島市『新修広島市史』第三巻六四三～六四四頁（一九五九年）